

「溝ノ口に集う人々」

～多摩川と大山街道に結節する文化～



令和3年2月

発行 川崎市

報告 日本地名研究所

1 本事業の趣旨・目的

川崎市の文化は、多様な地形や歴史を背景に育まれており、第2期川崎市文化芸術振興計画(改訂版)では、「地域資源を活用した特色ある文化芸術活動の推進」を施策の一つに掲げている。

地名は土地を識別するだけでなく、土地の由来やその地域に住んでいる人たちの関係や歴史を物語るものであり、生活や文化などについて伝えることができる貴重な文化財の一つと言える。

本事業は、市内の地名の由来を調査研究し後世に残していくとともに、研究成果を講座等の形で市民に還元することで、市民が地域への愛着と誇りを一層深めることを目的として実施するものである。

2 事業内容

(1) 調査研究内容

多摩川と大山街道が結節する溝ノ口を文化活動や人的交流の観点から調査研究及び研究成果を報告する講座(講演会とまち歩き)を開催する。

川崎市域の中部に位置づく溝ノ口は大山街道が通り、また多摩川により渡し場としての機能を持つ重要な村であった。その地で育まれた文化と人々の関わりが溝ノ口とその周辺地域に大きな影響があったことを、人物やその活動からみられる町の変化などを調査研究する。時代区分として江戸後期の村の様子と明治になってからの生活の変化やそこから生まれる人的交流など、町がどのように形成されていくかを事例を上げながら年表や資料から整理していく。溝ノ口という町がなぜそれらの事象の中心にあったのかなどを知ることで、川崎市域全体や周辺地域との関係が見えてくる。

また、本調査研究においては、溝ノ口の町の成り立ちと人々の関りが、大山街道を介して江戸(東京)との関係に加え、相模や三多摩など結節した地域との関係を掘り下げるとともに、村内における役職という立場の相互の関係性について明らかにした。

(2) 講演会

調査研究成果に関する講座を以下のとおり開催した。

日 時：令和2年12月5日(土) 13時半～16時

参加人数：49人

会 場：大山街道ふるさと館イベントホール

講 師：日本地名研究所 菊地恒雄

※講座の内容は、インターネットで動画配信し、研究調査の成果を広く市民に紹介する機会とした。

(3) まち歩き

調査研究成果に関するまち歩きを以下のとおり開催した。

【第1回】 日 時：令和2年12月9日(水) 13時半～16時

参加人数：15人

場 所：武蔵溝ノ口駅南口集合 大山街道を歩く

【第2回】 日 時：令和2年12月12日(土) 13時半～16時

参加人数：26人

場 所：武蔵溝ノ口駅南口集合 大山街道を歩く

講 師：日本地名研究所 菊地恒雄

※(2)、(3)については、コロナ感染予防対策の観点から、募集人数などに配慮した。

目 次

まえがき	・ ・ ・ ・	3
I、江戸時代の溝ノ口	・ ・ ・ ・	3
1、矢倉沢往還を行き来する商人	・ ・ ・ ・	3
(1) 継立村	・ ・ ・ ・	5
(2) 溝ノ口の町を支える	・ ・ ・ ・	5
(3) 二子の渡し場	・ ・ ・ ・	6
2、情報集積の場所	・ ・ ・ ・	6
(1) 江戸文化や情報をいち早く享受する	・ ・ ・ ・	6
(2) 大山参詣者	・ ・ ・ ・	7
(3) 溝口寄場組合村	・ ・ ・ ・	7
(4) 蘭方医太田家	・ ・ ・ ・	8
II、明治になってからの溝ノ口	・ ・ ・ ・	9
1、村の中核にある人々	・ ・ ・ ・	9
(1) 自由民権運動の拠点	・ ・ ・ ・	9
(2) 高津という名前	・ ・ ・ ・	1 1
(3) 文化の薫りを醸成する人々	・ ・ ・ ・	1 2
(4) 国木田独歩の『忘れえぬ人々』	・ ・ ・ ・	1 3
2、溝ノ口の栄枯盛衰	・ ・ ・ ・	1 4
(1) 大山街道沿いの商家	・ ・ ・ ・	1 4
(2) 高津銀行	・ ・ ・ ・	1 5
(3) 二子三業地	・ ・ ・ ・	1 6
おわりに	・ ・ ・ ・	1 7
報告会資料		
まち歩き資料		
溝ノ口人物年表		

まえがき

溝ノ口は行政上では「溝口」と記している。したがって、町の名の記載も溝口であるが、「みぞのくち」と読む。駅名ではJR南武線は「武蔵溝ノ口駅」、東急田園都市線・大井町線は「溝の口駅」と表記している。古くは「溝之口」と記載した文書もある。ここではあえて明治初期の村名をタイトルに付けて、溝ノ口周辺の地名と村の生い立ちや出来事を追ってみたい。

溝ノ口の地名由来については、従来は多摩川との関係で説明されることが多く、旧多摩川の流れに沿った溝(水路)と解釈されてきた。しかし、そこには、口の説明が欠落している。溝ノ口村は常に「平瀬川」の影響を強く受けていた。因みに、「平瀬川」の名称は明治の初めころと考えられ、それまでは「谷戸川」と呼ばれていた。安楽寺文書(下小田中村)によると、谷戸川は重要な用水であったと記載されている。また、同時に洪水期には溝ノ口村は谷戸川の氾濫で浸水し、早く多摩川へ排水(放水)することが課題であった。その溝(谷戸川)の口という方が説得力があるように思う。

二子村については江戸初期に幕府直轄領になったとあるが、それ以後も「二子村」についての記載がなく、二子塚付近にあった光明寺などが洪水の被害を受けて寛永18年(1641年)に光明寺と草分け七軒百姓がともに、矢倉沢往還筋へ移ったとあることから、それまでは溝ノ口村の枝郷として存在し、江戸初期に二子村として分村したと考える。

この報告では二子を含んだ地域を溝ノ口として取り上げ、人々の往来や関係についてのべる。

I、江戸時代の溝ノ口

江戸時代以前の溝ノ口の記録はほとんどない。稲毛荘の一部であったことは間違いないが、周辺の村のできごとから推測するしか方法がない。永徳2年(1382年)の『頼印大僧正行状絵巻』に鶴岡八幡宮の修理料所として「溝ノ口郷」が載り、寄進されていたことがわかる。また、『新編武蔵風土記稿』によると、天台宗の本立寺が、明王5年(1496年)に日蓮宗の宗隆寺に改宗したとある。宗隆寺は溝ノ口村の中心的寺院で、村人にとって重要な存在である寺が古くから存在していたことがわかる。この寺には、鎌倉末から室町期の板碑が存在する。

永禄2年(1559年)の『小田原衆所領役帳』に「海保新左衛門 稲毛溝之口」とあり、海保氏の所領であったこと、稲毛という記載がされていることがわかる。

1、矢倉沢往還を行き来する商人

溝ノ口・二子の町の中心を矢倉沢往還が通っている。大山街道とも呼ぶ。箱根の矢倉沢で東海道と合流するところから、矢倉沢往還と呼ばれた。また途中で雨降山(大山)があり、雨乞い神・農業の神として信仰され、矢倉沢往還は数多くある大山道の中でも重要な道に位置付けされていた。

神奈川縣武藏國橋樹郡溝口村

明治十四年二月
第一回測量開始

小地測量第一回
村境第二回
測量第三回
測量第四回
測量第五回
測量第六回
測量第七回
測量第八回
測量第九回
測量第十回
測量第十一回
測量第十二回
測量第十三回
測量第十四回
測量第十五回
測量第十六回
測量第十七回
測量第十八回
測量第十九回
測量第二十回
測量第二十一回
測量第二十二回
測量第二十三回
測量第二十四回
測量第二十五回
測量第二十六回
測量第二十七回
測量第二十八回
測量第二十九回
測量第三十回
測量第三十一回
測量第三十二回
測量第三十三回
測量第三十四回
測量第三十五回
測量第三十六回
測量第三十七回
測量第三十八回
測量第三十九回
測量第四十回
測量第四十一回
測量第四十二回
測量第四十三回
測量第四十四回
測量第四十五回
測量第四十六回
測量第四十七回
測量第四十八回
測量第四十九回
測量第五十回
測量第五十一回
測量第五十二回
測量第五十三回
測量第五十四回
測量第五十五回
測量第五十六回
測量第五十七回
測量第五十八回
測量第五十九回
測量第六十回
測量第六十一回
測量第六十二回
測量第六十三回
測量第六十四回
測量第六十五回
測量第六十六回
測量第六十七回
測量第六十八回
測量第六十九回
測量第七十回
測量第七十一回
測量第七十二回
測量第七十三回
測量第七十四回
測量第七十五回
測量第七十六回
測量第七十七回
測量第七十八回
測量第七十九回
測量第八十回
測量第八十一回
測量第八十二回
測量第八十三回
測量第八十四回
測量第八十五回
測量第八十六回
測量第八十七回
測量第八十八回
測量第八十九回
測量第九十回
測量第九十一回
測量第九十二回
測量第九十三回
測量第九十四回
測量第九十五回
測量第九十六回
測量第九十七回
測量第九十八回
測量第九十九回
測量第一百回



溝ノ口村と周辺の村(明治 14 年)

(1) 継立村

溝ノ口村は寛文 9 年(1669 年)に脇往還である矢倉沢往還の宿駅に指定され、溝ノ口に上宿・中宿・下宿の町が形成された。正式な宿駅でないところから継立村といった。その問屋場(といやば)を兼ねたのが、年番名主の鈴木七右衛門(丸屋)であった。常に馬 2 頭と人足 2 人を準備していた。役所も兼ねており、手紙の遣り取りなども行っていた。数年後には二子にも宿駅に指定され、月のはじめから 20 日は溝ノ口宿、21 日から晦日までは二子宿が受け持つことになった。二子村は年寄大貫家が問屋格を兼務したという。二子にも上宿・中宿・下宿が形成された。

次第に街道を使用する人々が増えたため、近隣の村にも助郷(すけごう)が課せられた。延宝 9 年(1681 年)に久地、諏訪河原、久本、末長村が二子村の助郷村となっている。それから 35 年後の享保元年(1716 年)に北見方、上作延、下作延が溝ノ口村の助郷村役を務めている。

『光明寺と矢倉沢往還』昭和 62 年刊行、川崎市博物館史料収集委員会(三輪修三編)に、溝口村「村入用帳」の資料が載る。この中に、弘化年間(1844~1847)の記録として、人足の出役数は 1,729 人、伝馬は 716 疋(ひき)で、人足は約 3 倍、伝馬は 100%の稼働であったという。その分助郷村の負担があったことを物語っている。※溝口村は 20 日間の人馬提供であったところから計算すると、月に 40 人として 12 ヶ月で 480 人となる。人足数が 1,729 人とあるから 3.6 倍となり、その分助郷村の負担が大きかったということになる。

(2) 溝ノ口の町を支える

江戸に近いことが溝ノ口の位置を強めていたように思われる。

溝ノ口村の名主鈴木七右衛門は農業のかたわら、商人として秦野の煙草や厚木の麦などを扱う卸問屋で江戸に運び商いをしていた。

二子村の大貫家は江戸で丁稚(でっち)として働き、その力量がかわれ独立し「大和屋」の名で矢倉沢往還沿いに店舗を開いた。幕府御用商人の権利を取得して武蔵・相模一帯で農産物の買い付けを行い、江戸に別邸を持つほどの隆盛を極めた。

溝ノ口村の上田安左衛門(稲毛屋)は大工をしながら材木商をしていた。江戸の大火で在庫の木材が高値で売れ、その資金で醤油醸造業を興す。数年後には軌道に乗り、江戸に向けて二子の渡し場付近から専用船で出荷するほどの繁栄ぶりであった。

溝ノ口には「亀屋」という旅籠屋があった。矢倉沢往還を利用して相模川の鮎を江戸庶民に届けることで有名で、その鮎担ぎ人の定宿として知られていた。先の「村入用帳」にあったように、矢倉沢往還は人の行き来が盛んであったことがわかる。公用外人馬継立や旅行者の宿泊に対応すると同時に、駄賃稼ぎなどの現金収入が町の勢いを増していった。

矢倉沢往還は各地の地場物を集積輸送し、市立(いちだて)が行われるなど物資の往来が豊富であったという。

(3) 二子の渡し場

矢倉沢往還は瀬田村の台地上にある法徳寺と行善寺の間を通過して、多摩川の河川敷へと降りてくる。現在の二子玉川駅の東寄り、多摩川堤防上に二子の渡し場の碑が立つ。そこから上流に向かって、斜めに東急田園都市線橋梁や二子橋の下をくぐって、二子村の渡し場が二子神社付近にあった。

渡し場の権利は当初、二子村が持っていたが、天明 8 年(1788 年)に対岸の瀬田村と共同経営を行うことになった。天保 12 年(1841 年)には詳細な運営方法について取り交わしを二者間の請負人瀬田村五郎次と渡守二子村市郎兵衛が行っている。

寛政 6 年(1794 年)「二子渡場頼母子講覚帳」という文書に、渡船は徒歩 36 文、馬持 72 文という記録がある。近隣の村々が頼母子講によって渡船を維持しようとしていたことが分かる。

渡船利用の頻度の高い渡河点周辺の村々が請負人と契約し、平素は無料で利用し年度決算で米銭を支払い、また土橋や船の修造などの費用を分担していた。

矢倉沢往還は健脚であれば、一般に荏田宿や長津田宿で宿泊するので、溝ノ口や二子の宿は休憩や間(あい)の宿としての性格が強かった。

二子の渡し場近くには、川船用の船着き場があった。年貢の積み出し港として、「二子の津出し」の記録があり、ここから船に年貢米を積込、多摩川の下流の六郷で大船に積み替えて蔵前まで運んでいた。このことから、多摩川には少ない船運を行う港であったことがうかがえる。記録にはないが、「津」と呼ばれていた可能性もある。

2、情報集積の場所

(1) 江戸文化や情報をいち早く享受する

矢倉沢往還は継立村であり、多摩川の渡し場という利点を生かし、商業が発達し人々の往来が盛んであった。江戸の変化をいち早く知ることができ、進取の気質が醸成される場でもあった。

江戸末期の天保 2 年(1832 年)に画家で蘭学者の渡辺崋山が記した『游相日記』があり、赤坂御門から矢倉沢往還の旅日記がある。そこに、二子の渡し場や溝ノ口村の描写がある。「渡シ有り、曰ク二子」「二子宿三十武(歩)」「又亭ヲ得ル」「曰ク溝口ハ、土白ク、赤松多シ、岡多くして、上下蛇行ス」とこれだけである。二子宿を歩数で計って百八十尺となり、凡そ 540m。溝口は土が乾燥して白っぽく感じる。岡には赤松が目立つ。根もじり坂は蛇行していると感想を述べている。

また、文化 5 年(1808 年)から 6 年(1809 年)にかけて、太田南畝が幕命で多摩川の巡察を行い、度々二子付近を視察している。溝ノ口はやや多摩川に直接接していないため、通過した記録が一度認められる。その記録『調布日記』では、久地村の里正(名主)の川辺家に宿泊している。そこで伝え聞いてことをこまめに記録している。

文化 6 年 3 月 4 日の条に、「瀬田村をすぎて、二子のわたしの柴橋をわたり、諏訪河原村北見方村をすぐ」と、同じく同 21 日の条に、「二子のわたしの土橋をこえて、久地村の河岸をみ」とある。渇水期には、渡船請負人によって土橋が架けられていた。

(2) 大山参詣者

大山参詣は旧暦の6月26日から3週間ほどがシーズンであった。7月7日までが「初山」、8日から13日までを「間の山」、14日から17日までを「盆」と称する。旧暦のちょうど梅雨明けにあわせて行われた。

大山阿夫利神社の例大祭を祝って、街道沿いに灯籠が灯された。二子の渡しを渡ると、二子の亀屋前、二子と溝ノ口境の六軒町、下作延と溝ノ口境の片町、根もじり坂上の笹の原地蔵前の4ヵ所に毎年「大山灯籠」が建てられた。灯籠は木の柱に、木組の火袋をのせ、上に板屋根、火袋には正面に「大山阿夫利神社」の墨書きがある。灯籠の四方に青竹が立てられ、しめ縄を張り、灯明を灯した。この景色が大山まで続いていた。

溝ノ口周辺の村々でも、大山詣の講が組織されている。溝ノ口には「大溝太々講（おおみぞだいだいこう）」があり、伊勢原の定宿「大木先導師宅」には「小溝太々神楽拾ヶ年奉上満願記念碑」（はじめは小溝と称していた）が建っており、平成23年(2011年)には100回の参拝を達成している。

北見方の白髭神社境内には現在も大山講が寄進した石灯籠がある。これは昭和3年(1928年)に建てたもので、「大山講太々御神楽」奏上記念とあり、22名の名が刻まれている。



(3) 溝口寄場組合村

いわゆる「文政改革」といわれる「関東向御取締筋御改革」というものが文政10年(1827年)に通達され、川崎市域では川崎宿と溝口村をそれぞれ寄場とする二つの改革組合村が編成された。これは百姓風俗取締りなどの強化と治安維持を目的として、幕府関東取締出役の指示に基づくものであった。

溝口寄場組合は61か村で構成され、橘樹郡稲毛領56か村と、神奈川領箕輪村及び都筑郡郡石川村・荏田村、多摩郡府中領中野島村・矢ノ口村からなっていた。小組合は3～7か村で構成されていた。

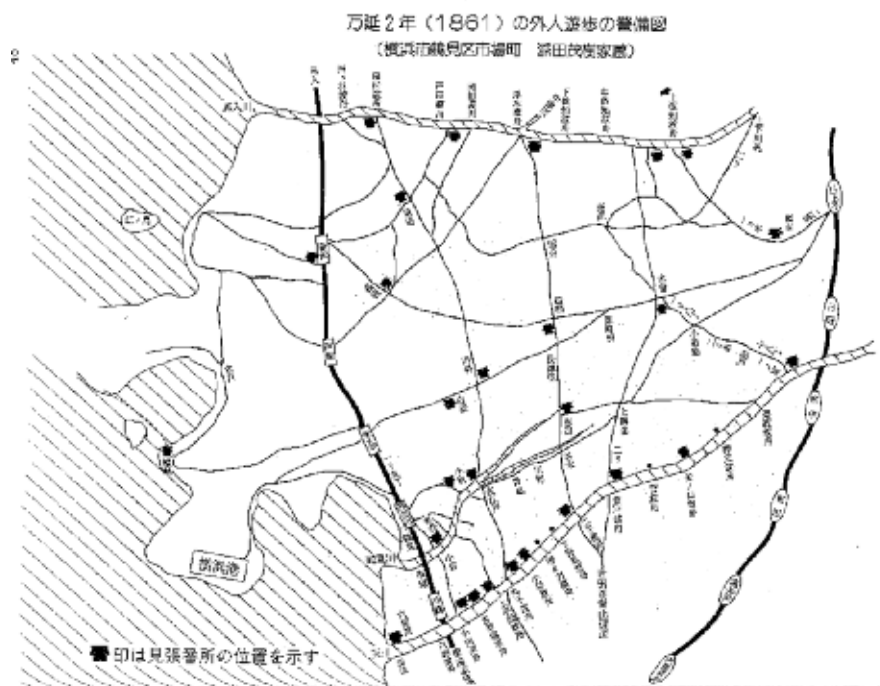
文政 10 年 8 月 27 日に吉田左五郎・河野啓助・太田平助・脇谷武左衛門の 4 名の関東取締出役は 61 か村の名主などを溝口村に招集し、「御取締改革の趣旨」を伝達した。

溝口寄場組合役所は、松原吉右衛門邸地内に置かれ、後に明治になると最初の郵便取扱所や「溝口ら卒屯所(溝口巡查屯所)」など行政の中心になる場所である。

溝口寄場組合村には、寄場役人が溝口村年寄吉右衛門、大惣代は下作延村名主治郎兵衛・諏訪河原村名主太郎右衛門・高石村名主清右衛門・上小田中村名主善三郎・駒ヶ橋村名主源太郎・久地村名主伊右衛門があたり、13 の小組合からの小惣代で構成され執務にあたった。

この組織がもっとも活躍するのが、幕末期の万延元年(1860 年)2 月に外国人遊歩地域境界に出された、「異人遊歩場所取締り」に関しての「見張番屋」の設置で、溝口寄場組合村管内では、上平間村・上丸子村・二子村・宿河原村・矢野口村に見張番屋が設置され、各村に要員が派遣の指示が出された。

二子村見張番屋には、地元役人 1 人、地元人足 2 人、道案内 1 人、番人 3 人の計 7 人が配置され、非常時には溝口村 35 人、下作延村 22 人、北見方村 14 人、新作村 11 人、久地村 28 人、馬絹村 27 人、有間村 23 人、末長村 29 人、上作延村 15 人、久本村 21 人、世田ヶ谷領野良田村 3 人、岡本村 9 人、鎌田村 4 人、世田ヶ谷村 23 人、用賀村 8 人、弦巻村 7 人、計 16 か村 279 人が駆け付けることになっていた。



(4) 蘭方医太田家

溝ノ口の片町に「御殿医様」と呼ばれた、蘭方医の太田家があった。濱田庄司の生家でもある。寛政 10 年(1798 年)頃に下作延村の矢倉沢往還の根もじり坂入口付近で、太田美啓が雑貨商のかたわら医業を行っていた。子息の道一は文政 8 年(1825 年)に江戸に出て手塚良仙光行のもとで、漢方と蘭方の医学を学ぶ。道一は師の名前から一字を戴き、「良海」と号した。文政 11 年(1828 年)に溝ノ口の片町に蘭方医として開業する。

良海は師の手塚良仙の推輓で、伊予西条三万石の城主、松平左京大夫の侍医となり、月に6回、溝口村の自宅から青山百人町の上屋敷にあがって拝診したという。大名の侍医としての格式をもつために、自邸の入口に二脚門を建てたという。これが、地元で「御殿医様」と呼ばれる由縁である。

その後天保5年(1834年)からは大槻俊斎のもとで蘭方医学を学ぶのである。

良海の子、資啓は東海と号し、父に医学を学び、嘉永2年(1849年)に大槻俊斎の門に入り研鑽し、下作延で開業する。安政6年(1859年)には溝ノ口の父のもとに移り、医院を継ぐ。

安政5年(1858年)の「お玉ガ池の種痘所」発足の蘭方医83名に一人として参画したのが太田東海である。種痘の種をこの地にもってきて、庶民に接種したことで多くの人々の知れることとなった。

大槻俊斎は、文久元年(1860年)種痘所が改称して西洋医学所となった、初代頭取となった人物で、良海・東海は当時の最高の医学知識を得る立場にあったことが想像される。

太田良海の子は、手塚良仙光行の子、良仙光照に嫁いでおり、姻戚関係を結ぶ。光照の数代後に手塚治(治虫)が誕生するのも何かの縁である。

良海の子、東海(資啓)の娘、アイが濱田久三に嫁ぎ、濱田庄司が誕生する。片町の交差点、庚申塔の祠近くに、濱田庄司記念碑「巧匠不留跡、庄司」が立っているわけを深く知る人は少ないのではないか。

Ⅱ、明治になってからの溝ノ口

1、村の中核にある人々

橘樹郡溝ノ口村は矢倉沢往還と八王子街道(府中街道)の結節点にあり、今までも人々の往来が激しかった。しかし、江戸が東京となり、品川県(川崎市域の大半)と神奈川県という二つの行政に関わる指示が飛び交い、その度に村への伝達文書が送達され、人々の様子がそこから読みとることができる。

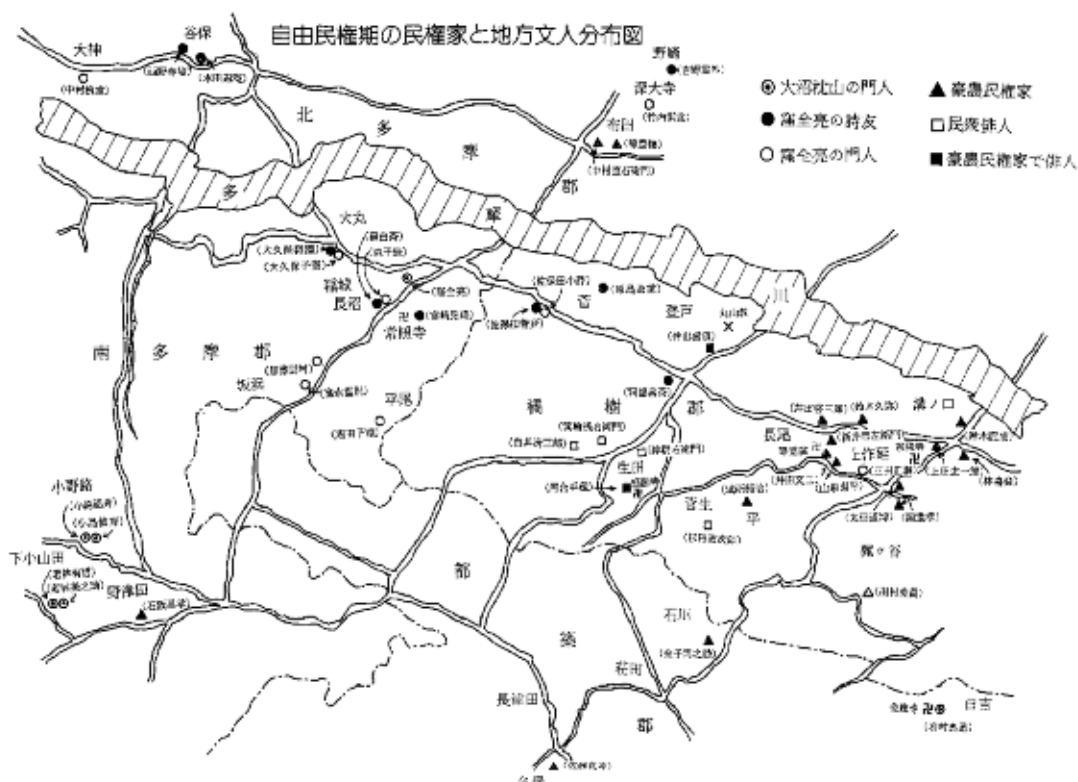
(1) 自由民権運動の拠点

明治という新しい世の中になり、村のリーダーは新政府の政策の末端として諸改革に取り組んでいた。手始めに行われたのが、学制の改革で、溝口学舎(宗隆寺)・二子学舎(光明寺)が創設され、教員の手配と学童の就学率の向上へと村役は大忙しであった。併せて、その費用を村が負担するのであるから大変なことであった。早く仮ではなく、本校舎を建設しなければならなかった。

溝口学校と名前を改め、明治6年(1873年)溝口233番地(溝口神社前)に新校舎が建つ。校舎建設に力を注いだのが、醤油醸造業で資産家であった上田忠一郎で、明治6年(1873年)に溝口・二子・下作延・久本4ヵ村の戸長を務め、明治10年(1877年)には溝ノ口学校世話役を担った人物である。

教育を通して町の発展を図ろうとしたが、新体制の中での矛盾も感じた上田忠一郎は、大和屋和菓子店の鈴木全象(久三の父・濱田庄司の祖父)、名主で油田中の鈴木直成などが中心となって、当時全国に広まっていた自由民権運動の溝ノ口周辺の指導的立場で活動を始めた。

川崎市域周辺でも複数の自由民権組織が形成され、また相互に情報を交流して、諸会合にも参加していた。



明治 12 年(1879 年)、第 1 回神奈川県会議員に上田忠一郎が選出される。しかし、明治 14 年病気を理由に議員を辞職している。明治 16 年(1883 年)7 月 15 日には池上幸操とともに自由党に入党している。

明治 14 年(1881 年)に「橘樹郡親睦会」(会主橘樹郡長松尾豊材)が発足。

明治 16 年(1883 年)に溝ノ口宗隆寺で政談演説会に 60 人参加。

明治 17 年(1884 年)に長尾等覚院で学術演説会に 70 人参加。太田道博が演説を中止させられる。

明治 18 年(1885 年)に溝ノ口で自由民権運動の親睦会が新小池楼(二子)で開かれる。

明治 16 年(1883 年)から 20 年(1887 年)にかけて、「頼母子講」という親睦団体をつくり活動を続ける。

上田家(溝ノ口)を訪れた自由民権活動家を列記すると、川崎市域以外は石阪昌孝・佐藤貞幹・平野友輔・金子馬之助・山本作左衛門・吉田健藏が、溝ノ口村の鈴木直成・太田道博・鈴木全象・村田禎三郎・鈴木清助・林喜楽、長尾村の鈴木久弥・井田啓三郎・新井市左衛門・井田文三、上作延村の三田正綱、久本村の岡重孝、北見方村の長崎七郎、登戸村の井



出喜重・三宅直行・小林五郎兵衛・阿部容斉、生田村の河合平藏・笠原巳之助、小杉村の小林三左衛門、大島村の青木豊十郎、川崎町の田中亀之助らの名前があがってくる。後に「上田サロン」と呼ばれるほど、人々が上田忠一郎を慕って集っていたことがわかる。

これらのリーダーのもとに各地で、村の経費節減の運動や生活改善運動、さらに知識教養を高める活動へと広がっていくのである。

しかし、自由民権運動に熱心に取り組むあまり、私財を投入するなど、家族を含めて決して成功者の道を歩む人は少なかったという事実がある。

国会開設により、自由民権運動そのものは表舞台からは去ったが、情熱を注いだ人々もそれぞれの道を歩み始めていった。そこで培ったことで文化や文学に目覚めた人々が出てくる。下谷仲御徒町の大沼枕山門下の小菅揆一(号香村)が明治30年(1898年)頃、溝ノ口の医師太田道和宅に寄宿し、「小菅香村塾」を開いた。この私塾に学び大いに影響を受けたのが、上田喜太郎、上田久七兄弟であった。上田喜太郎は溝口小学校の教員をしていたが、このことが縁で二松学舎に学び高校の漢文の教師となる。また上田久七は大正15年(1926年)に溝ノ口青年団分団長に就任し、音楽部や演劇部を創設する。全国各地の地元演劇の調査を熱心に研究し、溝ノ口に「村落劇場」を旗揚げする。自ら脚本を書き、出演者はもちろん、舞台装置や音響、照明まで地域の職人を動員しみごとな演劇を披露し、全国に名を知らしめたという。大正14年(1925年)に二子橋が架かり、昭和2年(1927年)に玉川電気鉄道溝ノ口線が溝ノ口まで全通し、同時に南武鉄道が開通し武蔵溝ノ口駅が開業する。町が大きく変わるその中での人々の変化を演劇にした。演目は「橋」は社会を風刺した。

(2) 高津という名前

明治22年(1889年)に町村制が敷かれ、周辺の村々が合併して大きな町や村が発足する。高津村は溝口・二子・久本・久地・下作延・諏訪河原・北見方・坂戸の各村が合併してできる。その初代村長が久本の岡重孝である。重孝氏は自由民権運動にも参加し、村の改革にも熱心であった。

初代岡道栄は長崎で医業を学び、縁あって久本の地で享保3年(1718年)頃に漢方の医院を開業することに始まる。代々医業を続けて、重孝氏は6代目である。明治になって医師をしながら大区小区制の溝口組の戸長を務めるなど、周辺の村役とも深く関わりを持っていた。

地租改正に伴う各村の地番と字を決めるにあたり、久本村は岡重孝氏の指導のもと線引が行われた。その結果生れたのが、平地部に鴛鴦町(おしがまち)・衛町(ちどりまち)・鴨居町(かもいまち)を、丘陵部に菊之園(きくのその)・桃之園(もものその)・梅之園(うめのその)という字を付け、久本村を桃源郷にしたいという強い願いを込めていた。

合併にあたり新しい村の名を決めるのに、皆で知恵をしぼった。その結果、高津としたが、その訳は記録に載っていない。言い伝えをここに披露する。岡重孝氏の発案であるともいい。また、太田家の東海(資啓)の弟の道博が述べたとも、諏訪河原村の黒伝八が「古代の天皇の都、高津宮(こうづのみや)付近の景色に似ている」と主張したとか。いずれにしても高貴な名を選んで、高津(たかつ)としたという。

岡家は7代信一、8代道孝、その弟栄一と医業を継ぐが、医業以外に素晴らしい才能を発

揮している。9代信孝の母は日本画家の川端龍子の娘千草で妻が濱田庄司の娘比呂というように芸術家の道を歩む。

7代信一は高津村村会議員、議長を務め、橘樹郡医師会会長を歴任する。8代道孝は画家・写真・コレクターで、民芸運動にも参加する。その収集品は岡コレクションとして川崎市に寄贈された。妻は、先に述べた川端龍子の娘千草である。弟の栄一は俳人で、また橘樹考古学会主宰で子母口貝塚の発掘とその保存に関わり、川崎市の考古学の礎を築いた人物である。

現在は溝ノ口駅南口近くに久本薬医門公園として、岡家の足跡を知る施設がある。



(3) 文化の薫りを醸成する人々

天才画家岡本太郎の母は岡本かの子であることはよく知られているが、なぜ二子出身と言われるのかは、案外知らないのではないか。かの子(カノ)は二子村の大貫寅吉の娘で、出生地は大貫家の別邸のあった、東京市青山南町である。子どもころは病弱で、二子で生活することがしばらく続き、尋常高等第一高津小学校に入学し、濱田庄司が二年後に同校に通った。

かの子は兄の雪之助(晶川)の影響を強く受けて、文学・短歌・宗教学に目覚める。しかし、兄の夭折(24歳没)によりその生き方にも大きな影響を受ける。

大貫雪之助の学友に谷崎潤一郎がいて、二子の大貫家によく顔を出し、またその周辺の仲間が集っていた。雪之助の死を悔み、昭和13年(1938年)にその碑が大貫家と矢倉沢往還を挟んだ位置にある光明寺の墓地内に建つ。

かの子は岡本一平(漫画家)と結婚し、岡本かの子となった。岡本太郎は二子の大貫家で生れる。その後フランス(パリ)に移住するが、太郎を残し帰国する。岡本太郎の苦悩と驚愕する才能が花開くのはこのことに始まる。

濱田庄司は、溝口「和菓子大和屋」の出身である。父は濱田久三であるが、大和屋は代々鈴木姓である。久三が旧姓に戻し、濱田を名乗った。庄司が生れたのは、前章で述べた太田家で母は太田アイである医者であった母の実家で出生し、「大和屋」で幼少期を過ごす。父久三は東京の西三田で文具店を営んでいた。庄司は下作延にある円福寺の私塾「松柏林塾」でかの子から習字を教わったという。二つ年上のかの子はかなり早熟であったことがわかる。

濱田庄司が陶芸に目覚めるには今しばらくの時間がかかった。文学や演劇など刺激になるできごとがたくさんあったが、「大和屋」の敷地裏に住む、美大生橋本邦三から美術を学び、

その筋の良さから、東京高等工業学校(後の東京工業大学)窯業科に進み、陶芸の道に入るが、その後も多くの出会いが庄司の才能と努力によって新しい陶芸の道(民芸)へとつながり、益子を拠点に活動することになった。

川崎市の濱田庄司に対する評価は決して高いものではなかった。昭和30年(1955年)人間国宝第一号という朗報に、川崎市では企画展を産業文化会館(教育文化会館)で開催し、濱田庄司直々の提案指導により開催することができた。

濱田庄司は民芸運動に関わった、柳宗悦、棟方志功、バーナード・リーチなどを溝ノ口に招き、父久三の墓参や地元主催の講演会を開いている。この講演会開催に尽力したのが「石匠慶雲四代目、内藤慶三」俳号「双柿庵」である。



(4) 国木田独歩の『忘れえぬ人々』

国木田独歩が小説の舞台を川崎の溝ノ口、亀屋を選んだことが、やはりここで述べる必要があるであろう。

その頃独歩は東京市の外れ渋谷に住んでいた。前年に渋谷の延長上にある武蔵野の小金井付近を散策し『武蔵野』という作品が生まれる。明治30年代(1898年代)は渋谷も武蔵野の一部であった。田山花袋とも親交があり、多摩川の二子の船遊びも経験していたと思われる。東京から少し離れた侘しさの漂う溝ノ口が、当時の独歩の心境と一致したのではないか。『忘れえぬ人々』の発表当時は、ほとんど評価されなかった。以前から親交のあった柳田国男が明治35年(1902年)に独歩の『凡人の伝』を絶賛するなど、独歩も活動の幅を広げていった矢先の明治41年(1908年)に結核で死亡する。最後の作品、短編集『運命』は自然主義文学の先駆けとして評価されるものとなった。



それから 20 数年後に、川崎の文学、詩歌で名高い佐藤惣之助が、二子の亀屋で俳句の会を開き、その折に、国木田独歩と亀屋のことが話題になり、勘違いが元であったが溝ノ口の亀屋前に「独歩の碑」を建立する動きが、持ち上がった。

昭和 9 年(1934 年)7 月 23 日に「国木田独歩碑」を亀屋の店先に建立され、除幕式が行われた。揮毫は島崎藤村。独歩の遺族と関係者が集い、改めて独歩と溝ノ口の人々が知ることとなった。島崎藤村は当日欠席したため、改めて 10 月 2 日に訪れ、「独歩碑記念舟遊ぶ」と藤村年譜に載る。

「忘れえぬ人々」とは、有名人や深く関わりのあった人のことでもなく、たまたま会った市井の人のことである。ここでは、亀屋の主人という設定になっている。

2、溝ノ口の栄枯盛衰

(1) 大山街道沿いの商家

現在の高津交差点付近に「田中屋(たなかや)」という店が多数あることに気が付くと思う。田中屋は屋号で、すべて鈴木姓である。現在高津図書館の場所に「油田中」という菜種油を絞って商いをしていた田中屋の惣本家であった。油の販売だけでなく、溝ノ口の大地主でもあった。次の章で述べるが、高津銀行への投資の失敗から売却し、一時は文教大学付属小学校があったが移転し、現在は高津図書館が建つ。その分家が「呉服の田中屋」「秤の田中屋」さらに「写真のたなかや」がある。

「呉服の田中屋」は藏作りの店で、惣本家の地続きにあり、田中屋(鈴木家)の盛衰を間近に見てきた。現在は店を閉め、建物だけが残っている。

「秤の田中屋」は、秤を商うには丁度法で国の認可を取得する必要があった。物資の集散地であり、信用が大事な商売ということで特許を取得して秤の専門店となる。周辺には秤を商う店がなく遠くからの注文があり、今でも昔のようにはいかないが店を切り盛りしている。表の看板に「秤とお茶」とあるのが、「秤の田中屋」の歴史で、目の前の府中街道はここまで、旧道に迂回しなければならなかった。その目の前の畑で茶を栽培し、焙煎して売っていた歴史が引き継がれている。

灰吹屋薬種店は三代目鈴木仁兵衛の時、明和 8 年(1771 年)に江戸から矢倉沢往還の溝ノ口に移り、生薬の製造販売をした。灰吹屋の由来は、冶金法に似た方法で灰に吸収させ採取したともいわれるが、よく判らず。各地に灰吹屋の屋号を持つ薬種店があることから、薬屋の代名詞であったようである。

灰吹屋三代目は俳人としても有名で、玉川老人亭宝水と号した。天保俳諧の大家「江戸自然堂」田川鳳朗に師事し、全国の俳人との交友が広がったという。

天保元年(1830 年)に鈴木仁兵衛は矢倉沢往還の人々の行き来を毎日見るにつけ、旅を栖(すみか)とする芭蕉の想いを感じ、芭蕉の句碑を建てることとした。溝ノ口の外れに「世を旅に代かく 小田のゆきもどり」と仁兵衛が揮毫し、二子の石匠小俣松五郎が刻んだ。

後に碑は溝ノ口下宿の灰吹屋の敷地内にしばらくあったが、現在は宗隆寺の裏山の七面山に移し保存している。三代目仁兵衛は天保 8 年(1837 年)81 歳で死去する。

明治 18 年(1885 年)新政府の制度「石薬舗開業免許候事」により、灰吹屋に薬剤師免許状

が交付された。明治 20 年代(1887 年代)に「官許」薬局は矢倉沢往還筋では、東京青山と溝ノ口灰吹屋の二軒だけだった。その後、子息は、薬剤師国家試験に合格し、旧店舗「店藏造り」を建設した。現在でも溝ノ口の町中に「灰吹屋」の店舗が複数あることに気付かれることでしょう。



(2) 高津銀行

明治 30 年代(1900 年頃)から各地で銀行の創設が始まる。それ以前は国の政策による銀行ができ、番号がふられた時代もあり、現在も第〇〇銀行という名があるのもその名残である。

川崎市域においても、地元篤志家による銀行創設が華々しく始まるが、大師銀行を除いてことごとく失敗し、他の銀行に譲渡したり、併合吸収されたりするなどの経過を歩む。大師銀行は国の政策でやむなく吸収合併されその使命を終る。

高津村では、明治 31 年(1899 年)当時の高津村役場の隣に「神奈川県農工銀行高津支店」が営業を開始する。その翌年の明治 32 年(1900 年)に高津銀行が、鈴木清助氏(油田中)が発起人となり、現在の高津図書館の地で営業を開始する。共同経営者に小川安藏氏、武笠政右衛門氏の名が連なる。監査役として翌年に高津村村長となる大貫寅吉氏、太田医院の太田資敬氏が就く。明治 33 年(1901 年)には横浜の勝田に支店を開くなど当初経営はうまくいった。

ところが、明治 34 年(1902 年)に武笠氏が都合で経営から身を引くことになる。社長の鈴木氏は銀行資金で株に投資して成功していたが、結果として株の暴落で経営が立ち行かなくなってしまう。勝田支店を閉鎖し、自分の家屋敷も売り払い高津銀行は大正 2 年(1913 年)頃に倒産した。

結果はそれではすまなかった。監査役の大貫家も負債を背負い、周辺にあった地所を売るなど、今までの生活とは違う姿を岡本かの子は実感として記録している。同じように太田家でもそれなりの責任を問われ、清算していたことを子息の太田良海(よしみ)氏が語っている。

神奈川県農工銀行高津支店は、その後現在の川崎信用金庫高津支店のある場所に移転して日本勧業銀行高津支店として昭和 17 年(1942 年)まで営業を続けていた。

(3) 二子三業地

東急田園都市線の二子新地駅は多摩川を目の前にし、対岸の二子玉川駅が臨める。二子新地の名前は、全国にあるいわゆる、料理屋・芸者屋・待合茶屋の三業種が多く存在する地域が通称「新地」と呼ばれ、また「三業地」とも呼ばれていたことに由来する。

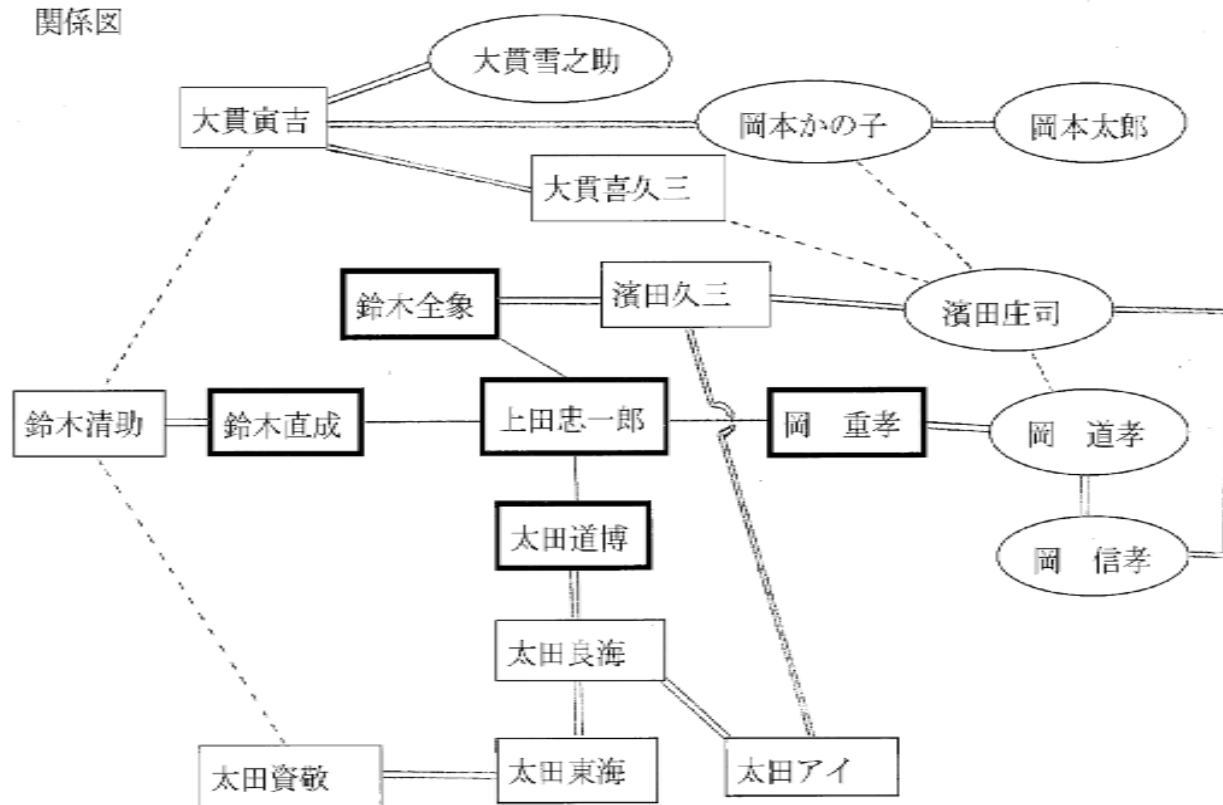
二子の「新地」はそんなに歴史は古くない。東京側の二子にも玉川遊園(後の第一玉川遊園)と呼んで、多摩川に船を浮かべ「舟遊び」と称する待合が存在し、東京の郊外として賑わっていた。大正 14 年(1925 年)に二子橋が架かり、昭和 2 年(1927 年)に玉川電気鉄道玉電溝ノ口線が渋谷一溝ノ口間で全線開通すると、二子新地付近に多くの料理屋が進出してくる。併せて、芸者屋・待合茶屋も出店して町が形成されていった。当時の駅名は二子電停(ふたこ)であったが、徐々に町が発展し、昭和 10 年(1935 年)には二子新地前駅と改称する。現在の駅名は昭和 52 年(1977 年)とある。

全盛期の二子新地の姿を記す『高津町史』昭和 7 年(1932 年)刊行)によると、「二子三業組合には組合員数 43 軒、待合茶屋 50~60 軒、芸者衆 100 人以上」とある。また、「料亭では川船を持つ店もあった。」とある。

田山花袋らが利用した二子「亀屋」はその代表格で、川遊びと称した「句会」を度々開いている。

二子神社本殿の左奥に出世稲荷があり、その扁額の寄進者が二子三業組合とある。境内入口にある街灯の柱にも二子三業組合とあり、二子新地駅から二子三業地までのあちこちに今でも街灯が灯っている。

関係図



おわりに

ここで取り上げた事例だけでも、溝ノ口という地域に関わった人々が、有機的に関り、開花発展していったことが読み取れる。

詳しくは記載しなかったが、石匠内藤慶雲は旧府中街道が交差する角に石材店を開いていた。慶雲の名は、世田谷の豪徳寺にある井伊直弼など歴代の墓碑建立の功績から拝命した由緒ある匠号といれる。矢倉沢往還筋だけでなく川崎市域中北部や横浜市域などに多くの石造物があり、江戸後期から明治にかけて活躍した。その子息の慶三氏は俳諧や民芸などに関心があり、溝ノ口の文化発展に貢献している。

また、濱田庄司が陶芸の道に進む契機となった、美大生橋本邦三は丸屋鈴木信平の弟で、濱田庄司に絵画の指導をしていた。濱田は画家になろうと思っていた。橋本邦三の友人で濱田家の向いに住む木村莊八(画家)家に掛けてある「ルノアール」の作品を見る機会があり、莊八から聞いたルノアールの言葉から、畑違いの陶芸の道に進んだという逸話が残る。

溝ノ口という地域は、多摩川を挟んだ江戸・東京という最先端の文化をいち早く入手できる場であり、また自らが出かけて技術や商売を取得して、地元に戻元する場でもあった。

特に矢倉沢往還(大山街道)を通して、さらに後背地の地域にそれらを伝える中継地としてその役割が各所にみられた。

大石橋の金物商稲毛屋は、米を主に日用雑貨を江戸へ送り、儲けた金で玉鋼を買い付けて、村内や近村の農鍛冶に売って財をなした。後に金物商として農機具など幅広い商いするようになる。

現在全国チェーンで書店を経営する文教堂書店の島崎さんの先祖は上田忠一郎らと、学校建設に奔走し、自分の地所を提供する。その後も俳句を通して文化活動に励む。亀屋前にあった「国木田独歩の碑」建立にも一役かっている。

他所で活躍した濱田庄司や岡本太郎が溝ノ口をこよなく愛した。濱田庄司は友人を伴って溝ノ口を訪れ講演会を開くなど交流が盛んに行われた。墓は父の眠る宗隆寺に埋葬される。岡本太郎は、母への思いを「かの子の碑」として多摩川が臨まれる二子神社境内の一隅に建てることができた。少し離れるが、生田緑地内に岡本太郎から寄贈された作品が「川崎市立岡本太郎美術館」として全国に紹介できるものうれしいことである。

参考文献

- 1、 川崎市史 通史編 2・資料編 2 平成 6 年
- 2、 川崎市史 通史編 3・資料編 3 平成 7 年
- 3、 川崎の文学を歩く 杉山康彦 平成 4 年
- 4、 神奈川の夜明け 小林孝雄 昭和 53 年
- 5、 日本医学史雑誌第 36 巻第 4 号 深瀬泰旦
- 6、 文化かわさき 4・6・8・19 号 川崎市総合文化団体連絡会
- 7、 郷土史資料覚書 上田恒三 平成 19 年
- 8、 高津物語 上・中・下 鈴木 穆 平成 16 年・20 年・27 年
- 9、 大山道今昔 かながわブックス 3 金子 勤 昭和 60 年

川崎市委託事業報告
調査研究及び普及啓発事業

「溝ノ口に集う人々」
～多摩川と大山街道に結節する文化～

2021 年（令和 3 年）2 月 28 日発行

発行 川崎市
調査研究報告 日本地名研究所